文化

え・桂川　寛

ジャズ断想

――巨星・ガレスピーとの出会い

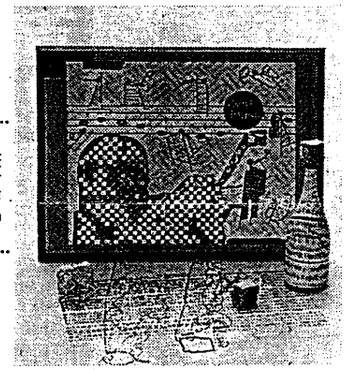
ジャズミュージシャン、作曲家
山木　幸三郎

いまも忘られぬ緊張感とふるえ

1993年1月7日日本時間午前3時、世界中の幅広いジャズ・ファンから最も愛されたデイジー・ガレスピーが惜しくも75歳でガンのためこの世を去ってしまいました。ミュージシャンとしてデイジー・ガレスピーの半世紀におよぶ多彩な音楽活動をふりかえりますと、その数かずの名演奏がよみがえってきます。その中のほんの一部ですが、1974年にアメリカ西海岸のモンタレージャズ・フェスティバルで共演できたこと。84年に南フランスのニースジャズ祭での再会。そして、88年、89年と二度のモンタレージャズ・フェスティバルでの楽しかった日々を一つ一つはっきりと思い出します。それだけにたいへん残念に思います。

いそのテルヲ大兄に「山木幸三郎は、僕が、ガレスピー・ビッグバンドのレコードを聴かせてから、その魅力にとりつかれて、勉強し、アレンジャーになり、デイジーを神様だと思っている男です」と紹介されて、デイジーの前に立った時、もう緊張しちゃって、体中ブルブルふるえて、結局ひとことも話せませんでした。

そもそもガレスピーを神様のように思ったのは、ジャズとの遭遇がなければありえないことでした。そのジャズを初めて聴いたのは、戦後の焼け跡で、進駐軍向け放送です。この前までは、日本軍歌と民謡などで、その時は、新鮮というより、「これは、ナンシャ」と不思議に感じたものです。思えば終戦の時は中学二年生で、いろいろな理由で（生まれは青山）富山市にいましたが、終戦のゴタゴタの時に東京に家出、出てきたはいいものの、生活できないから、千葉方面からお米のカツギ屋をして生計を立てていました。今の平井の三業地（料理屋、芸者屋、待合の称）にある寿司屋で買ってもらいました（当時銀シャリのスシを食べてる人種もいたのだ）。その寿司屋の主人がおもしろい人物だった。昔、吉原で、三亀松太夫（都都逸の名芸人）といっしょに三味線を弾いて流しをやって金をためめ、寿司屋を出したという人です。その息子さんが、また音楽好きで、家にはピアノ、アコーディオン、ギター、マンドリンなどいろいろありました。その息子さんの友人が、東京駅を根城にしている駐留軍のキャンプ向けミュージシャンバンドで、足りないメンバーを東京駅でさがしていました。それがきっかけでなんとなくズルズルと入ってしまい、気がついた時には、米進駐軍のキャンプ廻りのバンド・ボーヤ（楽器運び、ステージのセッティング、バンドマンへのお茶くみなど）をやっていました。



筆者作品

何年も前からの知り合いのように

相手を敬う気持ちで話してくれた彼

この当時は、われわれの廻りはまだまだ食糧難でしたが、キャンプへ行くと、山のような御馳走で、ウイスキーやビールなど、身も心も奪われていました。ジャズの方法とかは、先輩達はなんにも手ほどきをしてくれず、かといって資料なるものも何もなく途方に暮れている頃、有楽町の駅前に「コンボ」というジャズ喫茶などが出来はじめました。またブイデスクという大盤の米軍兵用の慰安レコードなどの中からジャズ盤を兵隊等から借りてコピーし、仲間等とまわし合ったりしたものです。またアメリカのジャズミュージシャンも兵役にとられて日本に来ていましたから、その人達がステージに上がってきて、「チョト、ガッキ、カシテクダサーイ」といって一緒に吹いて、ジャムセッションをやっては、いろいろ教えてくれました。形はまねしていくうちにだんだん整うようになりますが、それに心の加え方がわかるようになりました。モダンジャズの魅力のとりこになったのは、その後レコードが聴けるようになってからのことです。「鳥類学」という曲を書き、自らバードのように飛び立ったチャーリー・パーカーや20代の若さで死んだクリフォード・ブラウン。「朝日のようにさわやかに」のソニー・クラーク、セロニアス・モンクの「ラウンド・ミッドナイト」、ジャズ・メッセンジャーの「モーニン」、ジョン・ルイスの「ジャンゴ」、オーネット・コールマン。チャーリー・ミンガスなどの前衛派など、いろいろ黒人ジャズメンの影響を強く受けました。そして、デイジー・ガレスピーのビッグバンドを聴いて今までにない強い感銘を受けたのです。今でも「HR―134EV、ニューヨーク、1946年録音」は聴くたびに、その時の感動・ショックは今も変わりません。

ガレスピーに逢えたということは、ジャズと逢えたということで、このように青年時代、初めから何をやるとか、ましてジャズをやるなどとは夢にも思っておらず、非常にたわいのないものでした。もし寿司屋にアルバイトに行っていなかったらと思うと??? 1950年から60年の安保闘争へ向かっていたあの頃は、デイジー・ガレスピー・ビッグバンドのように体中メチャクチャに熱く、ガレスピーのラッパのように天に向かってバラバラにされそうなほど破壊的ではあるが、なんとも若いハーモニーのような快感が走っていたように思います。

1974年9月22日、モンタレージャズ・フェスティバルも終わり、隣に座って30分以上も話をしてくれました。初めてなのに、まるで何年も前からの知り合いみたいにデイジーは温かく、まるで磁石にひきつけられるような魅力を感じさせました。デイジーは本当に同じように相手を敬う気持ちをもって話してくれました。

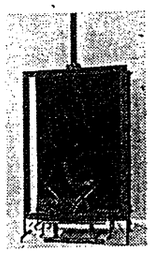
僕のスコアーを見て、「ここには書いてないが、3ツのテンション・トーンが聞こえるね」。なんのことかわからずたずねたら、「おれが吹いても、3回はミスするよ」と言って、クックッと笑ったものです。

（やまき・こうざぶろう）

【展覧会案内】

タデウシュ・カントル～我が芸術＝旅＝我が人生

ポーランドはクラクフの地にあって、その地を終生、自身の創作活動の場としたカントル。今回の展覧は、ほぼその全容を伝えるものとなっています。



カントル作品「自画像の額縁―画家のアトリエの断片」

絵画は言うに及ばず、舞台美術を含めた演劇活動を主体に多彩な活動を展開し、多大な影響を与えたカントルの原点は、生を受けた当時の第一次大戦、そして多感な青春時代の第二次大戦の線上にあったとされているが、生み出す作品の一つひとつが、紛れもなく〈無告の民〉を代表するものとなっている。いずれにしても、それこそ一つひとつの出会いを大事に、そこに記憶を重ね合わせていくカントルの創造的活動は、今後も一つの指標として残されていくことは間違いない。

同展は、東京・池袋のセゾン美術館で24日まで。

「新春詠」募集

日曜版「短歌」「俳句」の新春詠を募集します。20日（火）到着分まで受け付けます。